

施設実習指導授業への促進的試み

本山 芳男・藤 京子

Advanced Approaches to Facility Training Guidance

Yoshio MOTOYAMA Kyoko FUJI

キーワード：グループ学習 施設理解 授業満足度

I はじめに

「実習指導 I-2 における自主的な学びと施設理解」(千葉敬愛短期大学紀要 第 38 号 2016 年 3 月)において、自主的な学びへの関心が高いことを示したが、満足度という点では、「少し満足」と回答する傾向があった。

そこで、先の研究結果を踏まえて、学生が 15 回の授業終了時、より施設理解を深め、かつ授業への満足度が高くなるような実践的試みの論考をする。

II 方法

1 対象並びに数

A 保育専門学校 1 年 35 名と B 短期大学 1 年 169 名の計 204 名

2 授業期間

平成 27 年度 9 月から 1 月

3 アンケート調査

第 15 回授業終了後に実施したアンケートの構成は、質問 1 (取り組んだ施設)、質問 2 (教員の説明の有益性)、質問 3 (学生が小冊子に記入した質問等への教員のコメントの有益

性)、質問 4 (発表後に行った教員の補足説明の有益性)、質問 5 (まとめの有益性)そして質問 6 (授業への満足度)からなる。

4 授業の進め方

- (1) 第 1 回目に授業の進め方を説明し、その後「映像でつづる日本の社会福祉施設」(DVD (社) 日本生活問題研究所監修)を観る。
- (2) 第 2 回目に学生の希望に基づき調べる施設のグループ分けをし、7 回目まで図書室やパソコンを活用し、グループによる自主学習をする。なお調べる施設は施設実習の対象先となっている七施設(乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設、母子生活支援施設、福祉型障害児施設、医療型障害児入所施設、障害者支援施設)からなる。
- (3) グループごとに小冊子を作成させ、毎回授業終了時に質問等を記載させたものを提出する。
- (4) 授業の開始時に、上記 (3) の小冊子に書かれた内容に対しコメント(検索項目名や着眼点など)を記載し、更にグループごとに口頭で説明する。

- (5) 第 8 回から 14 回目までは、毎回 1 グループの発表（発表時間は 50 分）とし、発表後に教員が 40 分、補足説明と施設実習日誌の書き方を例示し、説明する。
- (6) 15 回目にまとめとして、施設実習にあたっての留意点、並びに実習日誌の書き方を再度説明する。

Ⅲ 結果並びに考察

1 質問 2（授業中の質問や疑問について）

質問 2 は、グループの調べ学習のなかで学生からの質問や疑問について、教員が対応する有益性についての問である。

(1) 量的分析

表 1 は、質問 2 の回答を示したものである（対象数 204 名であったが、1 名が無記入のため 203 名となっている）。

表 1 質問 2 への回答

回答肢	1	2	3	4	6	計
回答数	122	70	10		1	203

回答数が少ないことから回答肢 1、2、3 を抽出し、 χ^2 検定により差をみたところ 5% 水準で有意差が見られた（ $\chi^2 = 93.28$ $df = 2$ $P < .05$ ）。同様に回答肢 1、2 間の差を χ^2 検定により見たところ 5% 水準で有意差が見られ（ $\chi^2 = 14.08$ $df = 1$ $P < .05$ ）、「1 すごく役に立った」と回答していた。

表 2 の①は質問 2、②は質問 3 のクロス集計である（以下、①列は小さな質問番号、②行は大きな質問番号の回答肢番号を表すものとする）。

表 2 質問 2 × 質問 3 のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	96	18	7		1	122
2	37	24	8			70
3	1	5	4	1		10
4						
5		1				1
計	134	48	19	1	1	203

質問 2、3 の回答肢 1、2、3 を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見られた（ $\chi^2 = 13.63$ $df = 2$ $P < .05$ ）。同様に質問 2、3 の回答肢 1、2 を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見られた（ $\chi^2 = 16.10$ $df = 1$ $P < .05$ ）。このことは、期待値のうへで質問 2 において「1 すごく役に立った」と回答した学生は、質問 3 においても「1 すごく役に立った」と回答し、そして質問 2 において「2 少し役に立った」と回答した学生は、質問 3 においても「2 少し役に立った」と回答していることを示している。

また質問 2 と 3 の連関係数は、 $C = 0.29$ であり、関連性があることを示している。

表 3 は、質問 2 と質問 4 のクロス集計である

表 3 質問 2 × 質問 4 のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	111	11				122
2	33	33	4			70
3	2	3	3	2		10
4						
5	1					1
計	147	47	7	2		203

質問 2、4 の回答肢 1、2 を抽出し、 χ^2 検定により差をみたところ 5% 水準で有意差が見いだされた（ $\chi^2 = 38.87$ $df = 1$ $P < .05$ ）。

このことは表2の結果と同様、期待値のうえで質問2において「1すごく役に立った」と回答した学生は、質問4においても「1すごく役に立った」と回答し、そして質問2において「2少し役に立った」と回答した学生は、質問4においても「2少し役に立った」と回答していることを示している。

また質問2と4との連関係数は、 $C = 0.41$ で関連性があることを示している。

表4は、質問2と質問5のクロス集計である。

表4 質問2×質問5のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	102	18	2			122
2	27	35	8			70
3	2	5	2	1		10
4						
5						1
計	131	59	12	1		203

質問2、5の回答肢1、2を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ5%水準で有意差が見いだされた($\chi^2 = 36.01$ df = 1 P<.05)。このことは表2、3の結果と同様、期待値のうえで質問2において「1すごく役に立った」と回答した学生は、質問5においても「1すごく役に立った」と回答し、そして質問2において「2少し役に立った」と回答した学生は、質問5においても「2少し役に立った」と回答していることを示している。

また質問2と5の連関係数は、 $C = 0.4$ であり、関連性があることを示している。

表5は、質問2と質問6のクロス集計である。

表5 質問2×質問6のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	101	17	3	1		122
2	31	34	3	2		70
3		2	3	4	1	10
4						
5		1				1
計	132	54	9	7	1	203

質問2、6の回答肢1、2を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ5%水準で有意差が見いだされた($\chi^2 = 115.85$ df = 1 P<.05)。このことは、表2、3、4のクロス集計結果と同様に、期待値のうえで質問2において「1すごく役に立った」と回答した学生は、質問6においても「1すごく満足」と回答し、そして質問2において「2少し役に立った」と回答した学生は、質問6においても「2少し満足」と回答している。

また質問2と6の連関係数は、 $C = 0.62$ と高い関連性を示していた。

(2) 質的分析

表6は、質問2の回答肢への対象数と自由記述数を示したものである。

表6 質問2の対象数と自由記述数

回答肢	1	2	3	4	5	計
対象数	122	70	10		1	203
記述数	116	66	8		1	191

回答肢1、2を選択した学生のうち記述した182名(95.2%)は、授業内で行った説明が施設理解の深まりをもたらしたことを示していた。

「3どちらとも言えない」と回答した学生10名のうち記述した8名(4.1%)は、授業内容を理解出来ずに終了した可能性の高いことが

推測される。

「5 全く役に立たなかった」1名の学生は、授業内での説明は既知の内容だったために役に立たなかったことを意味しているものと思われる。

(3) 質問 2 への考察

質問 2 への回答肢の理由を見ると質問 3 (小冊子)、4 (補足説明) の内容も包含していると思われたが、取り組みそのものは、統計的に有意に「1 すごく役に立った」ことを示していた。また、質問 2 の回答肢の「1 すごく役に立った」「2 少し役に立った」を抽出し、他の質問 3 (小冊子)、4 (補足説明)、5 (まとめ)、そして 6 (満足度) における回答肢との関係を見ると、すべてにおいて統計的に有意差がみられた。つまり期待値のうえで、質問 2 で「すごく役に立った」と回答した学生は、他の質問においても「すごく役に立った」と回答し、「少し役に立った」と回答した学生は、他の質問においても「少し役に立った」と回答していた。

また、連関性と言う視点では、最も結びつきが強いのは質問 6 の満足度 (連関係数 0.62) であった。まとめ作業の中で、学生が具体的に直面している疑問に対応することは、満足度に結びついていることを物語っている。

次に連関性が強いのは、質問 4 の発表後の補足説明 (連関係数 0.41) と質問 5 のまとめ (連関係数 0.4) であり、次いで質問 3 の小冊子の活用 (連関係数 0.29) となっている。この質問 4、5 と質問 3 との違いは、そこに費やした時間の差が関係していると思われる。つまり、質問 4

の補足説明は、40 分ほど、質問 5 は 90 分使っているが、質問 3 の小冊子の活用に関しては、各グループ 3 分程度だったことが、連関性に関係していると思われる。

これらのことから初期の段階から学生の質問・疑問に丁寧に対応することが大切であると思われる。

また、今回「3 どちらとも言えない」と回答した学生の 8 名の記述を見ると、最後まで理解が出来なかったことを示していた。グループの中には、理解が及ばず何を質問してよいのか分からない学生もいるので、質問の有無に関係なく一人ひとりの状況を把握する必要がある。

2 質問 3 (小冊子の活用について)

質問 3 は、グループの調べ学習の際に学生が質問、疑問を小冊子に記載した内容に対して教員が助言したことの有益性について聞いたものである。

(1) 量的分析

表 7 は、質問 3 の回答結果である。

表 7 質問 3 への回答

回答肢	1	2	3	4	6	計
回答数	134	49	19	1	1	204

回答肢 1、2、3 を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見られた ($\chi^2 = 105.64$ df = 2 $P < .05$)。同様に回答肢 1、2 間の差を χ^2 検定により見たところ 5% 水準で有意差が見られ ($\chi^2 = 39.48$ df = 1 $P < .05$)、「すごく役に立った」と回答していた。

表8は質問3と質問4のクロス集計である。

表8 質問3×質問4のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	113	20	1			134
2	25	19	3	2		49
3	8	8	3			19
4	1					1
5	1					1
計	148	47	7	2		204

問3、4の回答肢1、2を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ5%水準で有意差が見られた($\chi^2 = 18.29$ df = 1 P<.05)。このことは、質問3において「1すごく役に立った」を選んだ学生は、質問4においても「1すごく役に立った」と回答し、そして質問3において「2少し役に立った」と回答した学生は、質問4においても「2少し役に立った」と回答している。

また質問3と4の連関係数は、C = 0.29であった。

表9は質問3と質問5のクロス集計である。

表9 質問3×質問5のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	106	24	4			134
2	19	25	5			49
3	5	10	3	1		19
4		1				1
5	1					1
計	131	60	12	1		204

質問3、5の回答肢1、2を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ5%水準で有意差が見いだされた($\chi^2 = 26.90$ df = 1 P<.05)。このことは、質問3において「1すごく役に立った」と回答した学生は、質問5においても「1すごく役に立った」と回答し、そして質問3

において「2少し役に立った」と回答した学生は、質問5においても「2少し役に立った」と回答している。

また質問3と5の連関係数は、C = 0.39であった。

表10は質問3と質問6のクロス集計である。

表10 質問3×質問6のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	99	28	5	2		134
2	22	23	1	3		49
3	11	2	3	2	1	19
4		1				1
5	1					1
計	133	54	9	7	1	204

質問3、6の回答肢1、2を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ5%水準で有意差が見いだされた($\chi^2 = 16.45$ df = 1 P<.05)。このことは、質問3において「1すごく役に立った」と回答した学生は、質問6においても「1すごく満足」と回答し、そして質問3において「2少し役に立った」と回答した学生は、質問6においても「2少し満足」と回答している。

また質問3と6の連関係数は、C = 0.36であった。

(2) 質的分析

表11は、質問3の回答肢への対象数と自由記述数を示したものである。

表11 質問2の対象数と自由記述数

回答肢	1	2	3	4	6	計
対象数	134	49	19	1	1	204
記述数	125	45	18	1	1	190

回答肢1、2と回答した学生のうち記述した

170名(89.4%)は、小冊子を活用して調べ学習を進めていたことを示していた。

「3 どちらとも言えない」と回答した学生のうち記述した18名(9.4%)は、毎回の学びの中での疑問などの湧出が乏しかったか、若しくはグループの他のメンバーに依存し、他律的な学びの結果が推測できる。

以下は、「4 あまり役に立たなかった」1名は、「あまり使わなかった」、「5 全く役に立たなかった」1名は、「一回も見えていない」というものだった。

(3) 質問3(小冊子への対応)への考察

グループで調べ学習をするときに、どのように取り掛かったらよいか、何を調べたら良いかを小冊子に書いたものへ教員が具体的な手掛かりを示した。このような取り組みに対して、統計的に有意に「すごく役に立った」という結果が得られた。

この授業以前の学びの中で実習対象の施設の設置根拠条文、職員の配置基準などの設備運営基準に関する法律、そして様々な資料は厚生労働省を検索すると調べることができることなど馴染みのないことだと思われる。それゆえ、学生が疑問に思い、壁に突き当たった時に説明することは必要不可欠なことだと思われる。

また、「3 どちらとも言えない」と回答している学生は19名(記述したのは18名)、「4 あまり役に立たなかった」1名そして「5 全く役に立たなかった」1名の計21名は、学びへの姿勢が不十分だったことが推測できる。その理由は、グループに返却する際に小冊子に記

載があるなしに関わらずグループ全員を集めて、進捗状況の確認並びに疑問点等が記載されている場合は、そのことへの説明をしていることから、意欲の乏しさや他者への依存の結果と思われる。そのために調べ学習に取り掛かる前に小冊子をもとにメンバー間の共通理解を図る時間をとり、そして終了時にメンバーがその日の取り組みの中での疑問に思ったことなどを話し合う時間をとる必要があると思われた。

さらに質問3と質問4(補足説明)、5(まとめ)、そして6(満足度)との回答肢間の関係を見ると、有意な交互作用が見られた。これは質問2と他の質問結果と同様、期待値のうえで最初に選択した回答肢と同様に他の質問のおいても選択されることを示している。

また質問3と他の質問間の関連性を見たと、質問4の補足説明(関連係数0.29)、質問5のまとめ(関連係数0.39)そして満足度(関連係数0.36)と関連性はあるもののそれほど高い数値を示していない。このことは、学生にとって小冊子の活用の位置づけの低さを物語っている。このことに対して、グループメンバーの意思が小冊子に盛り込まれるような活用のさせ方をするすることで、小冊子への意味付けが増し、そのことが授業後の補足説明などと結びつき、結果として満足感への寄与になっていくものと思われる。

3 質問4(補足説明)

質問4では、学生の発表後に行った補足説明の有益性についてのものである。

(1) 量的分析

表 12 は、質問 4 への回答結果である。

表 12 質問 4 への回答

回答肢	1	2	3	4	5	計
回答数	148	47	7	2		204

回答肢 1、2、3 を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見られた ($\chi^2 = 156.64$ $df = 2$ $P < .05$)。さらに回答肢 1、2 間の差を χ^2 検定により見たところ 5% 水準で有意差が見られ ($\chi^2 = 52.31$ $df = 1$ $P < .05$)、「すごく役に立った」と回答していた。

表 13 は質問 4 と質問 5 のクロス集計である。

表 13 質問 4 × 質問 5 のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	119	22	6	1		148
2	10	34	3			47
3	1	3	3			7
4	1	1				2
5						
計	131	60	12	1		204

質問 4、5 の回答肢 1、2 を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見いだされた ($\chi^2 = 19.34$ $df = 1$ $P < .05$)。このことは、質問 4 において「1 すごく役に立った」と回答した学生は、質問 5 においても「1 すごく役に立った」と回答し、そして質問 4 において「2 少し役に立った」と回答した学生は、質問 5 でも「2 少し役に立った」と回答している。

また質問 4 と 5 の連関係数は $C = 0.50$ であった。

表 14 は、質問 4 と質問 6 のロス集計である。

表 14 質問 4 × 質問 6 のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	114	29	3	2		148
2	19	21	4	2	1	47
3	1	3	2	2		7
4	1	1		1		2
5						
計	133	54	9	7	1	204

質問 4、6 の回答肢 1、2 を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見いだされた ($\chi^2 = 19.34$ $df = 1$ $P < .05$)。このことは、質問 4 において「1 すごく役に立った」と回答した学生は、質問 6 においても「1 すごく満足」と回答し、そして質問 4 において「2 少し役に立った」と回答した学生は、質問 6 においても「2 少し満足」と回答している。

また質問 4 と 6 の連関係数を求めたところ、 $C = 0.30$ であった。

(2) 質的分析

表 15 は、質問 4 の回答肢への対象数と自由記述数を示したものである。

表 15 質問 4 の対象数と自由記述数

回答肢	1	2	3	4	5	計
対象数	148	47	7	2		204
記述数	139	44	7	2		192

回答肢 1、2 と回答した学生のうち記述した 183 名 (95.3%) は、発表後の教員の補足説明が理解の深まりをもたらしたことを示していた。

「3 どちらとも言えない」と回答した学生のうち記述した 7 名 (3.6%) は、発表内容への基本的な理解が不十分なことが推測される。

「4あまり役に立たなかった」と回答した学生2名は、「3どちらとも言えない」を記述した学生以上に理解できないままでいたことが推測できる。

(3) 質問4（補足説明）への考察

この補足説明は、先の研究で把握した学生の理解しにくい点、そして発表の中で不十分な点をグループ発表後に行った。

前年度の研究の中で、学生が理解しがたかった内容を児童養護施設について例示すると、

- ①施設の入所、退所の仕組み、
- ②子どもの生活形態の小規模化（小規模グループケア、地域小規模児童養護施設）の方向性、
- ③子どもの権利擁護の意味

というものが該当していた。ただ、この際留意しなければならないことは、発表した学生も一生懸命調べたうえでの発表なので、その気持ちを尊重し、言葉を選んで補足説明することで、発表した学生にも聞いている学生にもすんなりと耳に入ってくると思われる。

それでも補足説明に対して「3どちらとも言えない」7名と「4あまり役に立たなかった」2名の計9名は、施設理解の基本軸が混沌としており、グループの発表内容、その後の補足説明が部分的な情報として入力され、それらが自分の中で整理されなかったものと思われる。そのために教員は、取り組みの2から4回目にかけてグループごとに話し合う時間を設けて支援することが必要である。

また、質問4と他の質問間の関連性を見たと、質問5のまとめ（連関係数0.50）、質

問6の満足度（0.30）と関連していることを示している。特に質問5と強い関連性を示していたが、それに比べ質問6の満足度との関連性は低くなっている。質問4と質問5に関しては授業内容（補足説明と授業のまとめ）に関して聞いていることが、関連を強めているものと思われる。

4 質問5（まとめ）

質問5では、まとめの有益性についてのものである。

このまとめは、第8から14回目まで7施設の発表を終えた後の15回目で、各施設に共通すると思われる内容や実習生として理解しておいて欲しいことを説明したものである。それは、(1) 施設の小規模化、(2) 措置と契約 (3) 実習生として (①個別化、②権利擁護③学ぶ気持ち)、(4) 実習日誌の書き方というものであった。

(1) 量的分析

表16は、質問5への回答の結果である。

表16 質問5への回答

回答肢	1	2	3	4	5	計
回答数	131	60	12	1		204

回答肢1、2、3を抽出し、 χ^2 検定により差を見たと、5%水準で有意差が見られた ($\chi^2 = 104.59$ $df = 2$ $P < .05$)。さらに回答肢1、2間の差を χ^2 検定により見たと、5%水準で有意差が見られ ($\chi^2 = 25.78$ $df = 1$ $P < .05$)、「1すごく役に立った」と回答していた。

表 17 は、質問 5 と質問 6 のクロス集である。

表 17 質問 5 × 質問 6 のクロス集計

② ①	1	2	3	4	5	計
1	103	23	3	2		131
2	26	26	4	3	1	60
3	4	5	2	1		12
4				1		1
5						
計	133	54	9	7	1	204

質問 5 と 6 の回答肢 1、2 を抽出し χ^2 検定により差を見たところ 5% 水準で有意差が見られた ($\chi^2 = 21.59$ $df = 1$ $P < .05$)。このことは、期待値のうえで質問 5 において「1 すごく役に立った」と回答した学生は、質問 6 においても「1 すごく満足」と回答し、そして質問 5 おいて「2 少し役に立った」と回答した学生は、質問 6 においても「2 少し満足」と回答している。

また質問 5 と 6 の連関係数は、 $C = 0.32$ であった。

(2) 質的分析

表 18 は、質問 5 の回答肢への対象数と自由記述数を示したものである。

表 18 質問 5 の対象数と自由記述数

回答肢	1	2	3	4	5	計
対象数	131	60	12	1	0	204
記述数	117	50	9	0	0	176

回答肢 1、2 と回答した学生のうち記述した 167 名 (94.8%) は、15 回目のまとめに対して、それまでの学びと実習を結び付けるなどこの授業の意味付けがなされていることを示している。

「3 どちらとも言えない」と回答した学生の

うち記述した 9 名 (5.1%) は、施設のイメージの不十分さが推測される。

(3) 質問 5 (まとめ) への考察

授業 15 回目で今まで調べ発表した施設に関して、大切なことはたくさんあるが、最大公約数的にこれだけは頭の片隅においてほしいことを説明したことに対して、統計的に有意に「すごく役に立った」ことを示していた。

この質問 5 の授業のまとめと質問 6 の満足度との連関はあったが (連関係数 0.32)、それほど高いものではなかった。

これは、質問 4 の補足説明と質問 5 の授業のまとめに高い連関性が見られたが、質問 4 の補足説明と質問 6 の満足度の連関が高くなかった理由と同じだと思われる。つまり学生の満足度は、グループ発表前の調べ学習の時に、学生の疑問等にどれだけ対応したかが関係していることになる。

なお、9 名の学生が「3 どちらとも言えない」を、1 名の学生が「4 あまり役に立たなかった」と回答した。統計的には「1 すごく役立った」「2 少し役だった」と回答した学生が 5% 水準で有意に多いことを示しているが、このことは 5% の過誤があることを示している。つまり「3 どちらとも言えない」9 名と「4 あまり役に立たなかった」1 名の計 10 名がそれに該当する。学生を指導する場合、この 5% の過誤を限りなく少なくする工夫が必要になる。

そのために、質問 3 の考察のところで述べたように、調べ学習に入る前に、教員から返却された小冊子のコメントを共通理解するような話し合いを持ち、そして調べ学習終了前

にグループメンバーがその日の振り返りをし、次につなげていくという取り組みによって、「どちらとも言えない」「あまり役に立たない」と回答する学生が少なくなることが期待できる。

このような取り組みをした後に「まとめ」として、必要なポイントの説明をすることでより学生の学びへの満足につながっていくものと考えられる。

5 質問6（満足度）

質問6では、15回終了時の満足度を聞いたものである。

(1) 量的分析

表19は、質問6の回答結果である。

表19 質問6への回答

回答肢	1	2	3	4	5	計
回答数	133	54	9	7	1	204

回答肢1、2、3を抽出し、 χ^2 検定により差を見たところ5%水準で有意差が見られた（ $\chi^2 = 120.62$ $df = 2$ $P < .05$ ）。さらの回答肢1、2間の差を χ^2 検定により見たところ5%水準で有意差が見られ（ $\chi^2 = 33.37$ $df = 1$ $P < .05$ ）、「すごく満足」と回答していた。

(2) 質的分析

表20は、質問6の回答肢への対象数と自由記述数を示したものである。

表20 質問6の対象数と自由記述数

回答肢	1	2	3	4	5	計
対象数	133	54	9	7	1	204
記述数	126	45	8	6	1	186

回答肢1、2と回答した学生のうち記述した

171名（91.9%）は、自分たちで調べたことなど自主的な学びに対して取り組み等への満足感を示していた。

「3どちらとも言えない」と回答した学生のうち記述した8名（4.3%）は、自グループの調べた施設と他グループの施設の共通項を抽出して総合しての理解が十分出来なかったものと思われる。

「4あまり満足していない」と回答した学生の記述から二つのことが考えられる。ひとつはグループメンバーのモチベーションであり、もうひとつはグループ発表の内容を自分の中で整理できにくかったという点である。

「5全く満足していない」1名は、「分からないことが多かった」というものである。

(3) 質問6（満足度）への考察

今回の取り組みに対して、学生は統計的に有意に「1すごく満足」（記述統計では65.1%）が「2少し満足」（記述統計では26.4%）より多いことを示していた。

さらに「1すごく満足」と回答した学生は、「たくさんのことを学べた」と「大変だったけど充実していた」という理由を挙げ、学べたことや達成感を味わったことをその理由として挙げていた。

この背景にあることとして、2回目から7回目のグループごとの学生の取り組みに対しての質問2（授業内での質問や疑問への支援）と質問6の連関性（連関係数0.62）が、他の質問との連関性より高いことから学生の満足度は、個別（グループごと）に学生への支援がなされることが反映しているものと思われる。

そして、「3 どちらとも言えない」9 名（記述した学生 8 名）、「4 あまり満足していない」7 名そして「5 全く満足していない」1 名の計 17 名（8.3%）の学生たちの気持ちを「1 すごく満足」「2 少し満足」へシフトさせるために、質問 4 の補足説明のところで述べたように“取り組みの 2 から 4 回目にかけて教員が、グループごとに話し合う時間を設けて支援することが必要になると思われる。

Ⅳ まとめ

今回の研究は、先の「実習指導Ⅰ－2における主的な学びと施設理解」（千葉敬愛短期大学紀要（第 38 号 2016 年 3 月）の継続的な研究である。

先の研究で多くの学生は、演習形式の取り組みに対して、次回も演習形式での学びをしたいと回答していたが、学びの満足度という点では、「1 すごく満足」より「2 少し満足」が多かった。

今回の研究の目的は、先の研究で行った取り組みと同様の形態をとりつつ、施設理解をすることと、学びの満足度という点で「2 少し満足」から「1 すごく満足」へ移行するような実践的な試みである。

そのために行ったことは以下の五点である。

- ① 開始時点で前年度同様に冊子をグループごとに作成させ、授業終了後に取り組み経過並びに質問、疑問を書かせ教員に提出させる。
- ② 教員が提出された冊子に書かれている質問、疑問等へコメントを記載し、当該授業開始時にグループごとに説明し返却する。

【質問 3】

- ③ 併せて授業中に冊子にコメントしたことへの理解促進を図る。【質問 2】

- ④ 発表後の補足説明と併せて、実習生として学んで欲しいことや施設実習日誌の書き方を例示し、説明する。【質問 4】

- ⑤ 15 回目では、今までの発表を踏まえて、施設実習に必要と思われるポイントと再度施設実習日誌の書き方を説明する、ことである。【質問 5】

- ⑥ このような取り組みに対して、15 回終了後に授業の取り組みへの満足度を把握する。

【質問 6】

今回の研究の目的は二つあった。ひとつは、施設理解を深めるということだった。しかし、理解の深まりについて試験を実施していないので数量化は出来ないが、その代わりに教員の行ったこと（小冊子に記載された学生の疑問、質問に回答する、学生のグループ活動中に学生の質問、疑問等に対応する、グループ発表後により理解を図るための補足説明等）が、学生にとっての役立ちの程度を理解のパロメーターとした。結果として、教員の取り組みは、統計的に有意に「すごく役立った」ことを示していた。

また、もうひとつの研究の目的は、学生の授業への満足度を「2 少し満足」から「1 すごく満足」へシフトさせることであった。この点に関して今回の取り組みが、統計的に有意に「1 すごく満足」であることを示していたことからアンケートの質問 2 から 5 で聞いた内容が満足度へ反映したものと思われた。

さらに質問 2 から 5 のそれぞれと質問 6（満

足度)の連関性に着目すると、そのいずれもが満足度にある程度連関していることを示していたが、その中で特に連関(以後、結びつきと言う)を示していたものがあった。それは質問2(学生のグループ活動中に学生の質問、疑問等に対応する)の有益性と満足度の結びつきが、他の内容と比べた時に抜きん出たことである。

質問2をはじめとして、それ以外の質問で聞いた内容に関しても統計的に有意に「1 すごく役に立った」と回答していたことから、質問6の満足度と強い結びつきを示すと思われるが、突出した結びつきを示したのが質問2の内容であった。それは、学生の中には内容構成、調べる内容、そして検索項目などに苦慮していた者もいた。そのような壁にぶつかった時に、助言や説明した結果、自分たちの力でまとめ上げることが出来たという達成感が満足感に繋がっていたものと思われる。それゆえ、まとめ上げる過程での様々な支援を受けたという思いと、なんとか体裁を整えることが出来たという結びつきだと思われる。

そうだとしたら本研究で明らかになった統計的に有意な「すごく満足」は、ほんの入り口部分と言える。と言うのはまとめる過程での満足感をもたらすことが目的ではなく、学びのすべてに対しての満足感を求めているからである。

まとめ上げたものは、他所からの内容の貼り付けで自分の中で理解しきれていない、取違いをしている箇所、さらには担当した部分だけの理解で全体像を描き切れていないこともある。その部分を補っていくのが、発表後

の補足説明であり、15回目のまとめと言うことになる。言うなれば7回目までのまとめは、磁石に例えることが出来る。そしてその後の他のグループの発表内容や補足説明そして15回目のまとめの説明がその磁石に吸い込まれ、当初の磁石(まとめたもの)は、さらに膨らんでいくことになる。

本研究では、授業への満足度を「2 少し満足」から「1 すごく満足」へシフトさせることに関しては達成したが、さらに工夫の余地があると思われた。

そのために学生が自グループのまとめをしている過程で、教員とグループ構成員が話し合う時間を設け、学生相互が担当している箇所の共有を図り全体としての理解を深めるようにすること、そして施設への認識やつまづきを把握し、必要な支援を展開することなどが必要になる。

その際留意することとして、施設実習指導は、それが独立しているのではなく、他の教科間の学びの上に立った総括的な学びをしているということである。そのため学生の支援に際して社会的養護という視点(愛着が子どもの発達に及ぼす影響、それに係わるエリクソン、マズロー、ボウルビーなどの理論)、障害を持っている子への理解、権利擁護、パターンリズムとしての措置などが理解できるように支援する必要がある。つまり施設で生活している子どもがよりよく生きるために、上述した様々な学びを基礎にして施設(生活の場)をまとめることが必要になる。そのようなまとめ方が出来ると補足説明や他の施設の発表を聞いて、それらを自分たちがまとめた内容

へ同化し、若しくはまとめた内容を調節することになる。そして、内容のすそ野の広がりや深さがもたらされることになり、満足感へ繋がっていくものと思われる。

IV 参考文献

- 藤 京子 「保育実習指導（施設）における授業内容の考察と課題」全国保育士養成協議会第 51 回大会、2012 年
- 藤 京子 本山 芳男 「実習指導Ⅰ - 2 における自主的な学びと施設理解」千葉敬愛短期大学紀要 第 38 号 2016 年 3 月 P49 ～ 67
- 松本 峰雄 監修 藤 京子 増南 大志 中島 健一郎 「より深く理解できる施設実習」萌文書林 2015 年 10 月
- 本山 芳男 「実習指導（施設）についての一考察」日本乳幼児教育学会、第 24 回大会研究発表論文、2014 年
- 本山 芳男 「実習指導Ⅰ - 2 における自主的な学びの導入」千葉敬愛短期大学紀要 第 37 号 2015 年 3 月 P101 ～ 110